様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 11 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７２００３５
研究課題名（和文）　共和制崩壊前後のシエナにおける宗教イメージに関する包括的研究

研究課題名（英文）　A Comprehensive Study on the Sacred Image in Siena around the Fall of the Republic

研究代表者
松原　知生　（MATSUBARA TOMOO）
西南学院大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：２０４１２５４６

研究成果の概要：
本研究は、1555 年における共和国滅亡前後の近世初期シエナにおける宗教イメージの諸問題をその対象とする。とりわけ、政治的に不穏な状況にあった当時のシエナ市民が、いにしえのイコン（多くは聖母マリア像）に対する崇拝をどのようにプロモートしたのかという宗教文化史的な問題、および、絵画作品における聖母の幻視や顕現の図像が当時の時代情勢とどのようなに関連しているのかという美術史的な問題（もちろんこれらの問題は一枚の作品においてリンクすることもある）について、個々の作品や文献の分析を通じて解明を試みた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 18 年度	1,300,000 円	0 円	1,300,000 円
平成 19 年度	1,100,000 円	0 円	1,100,000 円
平成 20 年度	1,100,000 円	330,000 円	1,430,000 円
年度			
年度			
総　計	3,500,000 円	330,000 円	3,830,000 円

研究分野：　人文社会系　人文学
科研費の分科・細目：　哲学　美学・美術史
キーワード：　西洋美術史、イタリア、シエナ、ルネサンス、マニエリスム、ベッカフーミ、ソドマ、ジョヴァンニ・ディ・ロレンツォ

１．研究開始当初の背景

(1)　16 世紀シエナ絵画の研究は、20 世紀初頭から散発的に行なわれてきたが、より批判的で厳密な考察がなされたのは、主に 1980 年代以降にシエナで開催されたいくつかの展覧会を通じてであった。また、ズリッキア＝サントーロが 1980 年代に発表した諸論文や、最近のバルタリーニによる一連のソドマ研究などが特筆されるが、これらはほぼいずれも、作品の作者帰属や年代推定を軸とした様式論的なものであり、芸術現象を当時の政治史的文脈との関係で考察しようとする視点に欠けていた（この種の試みとしてはピネ

ッリによるいくつかの論文が挙げられるのみである)。

(2)　他方、共和国滅亡前後のシエナの政治史については、中世の「黄金時代」に比較して研究が十分になされていなかったが、最近ではランディ（1994 年）やフザーイ（1999 年）による著作、レンツィによる論文（1995 年）がある程度まで明らかにしている。だが芸術との関連についてはほとんど言及がなく、いくつかの絵画が挿絵として掲載されているにすぎない。また、16 世紀シエナにおける聖像崇拝の諸相（特に中世の礼拝像への信仰の高まり）については、ジャンニの論文（2002 年）がきわめて重要な方向性を示しているが、その後の考察が十分に進められているとは言いがたい。

(3)　これに対し、研究代表者による従来（特にシエナ留学以後）の一連の考察は、以上のようにこれまで切り離して別個に行われてきた美術史・政治史・聖像崇拝という３つの分野を密接に関連づけるべく展開されてきた。本研究は、このような学史的背景の下に続けられてきた研究の延長線上に位置づけられ、それをいっそう包括的な視点から捉えようとするものであった。

２．研究の目的

(1)　研究代表者は数年来、16 世紀シエナの宗教画について考察を進めてきた。とりわけ、①天上的存在の幻視と顕現、すなわち本来は表象不可能なものが画中にいかに表象されているか、②当時の宗教イメージの制作・受容が中世期の霊験あらたかな奇跡像の再評価とどのような関係をもったか、③1555 年のシエナ共和国滅亡というトラウマ的な出来事とその前後の政治史的動向が宗教イメージのあり方にどのような影響を及ぼしたのか、という３つの主題に着目しながら、16 世紀シエナの宗教美術を、同時代の社会的・政治的文脈や神学的背景と関連づけながら総合的に考察することを目指している。本研究が着手された時点では、16 世紀初頭におけるベッカフーミの初期作品３点を①の観点から、1530 年代にソドマが制作したいわゆる「絵画タベルナークルム」（近世の大型祭壇画の中央に中世の小型礼拝画をはめ込んだもの）を②と③の観点から考察し、その成果を論文や口頭発表のかたちですでに公にしていた。

(2)　本研究の課題は、時代的・主題的な点において、以上の先行研究の延長線上に位置づけられるものである。すなわち時代的に言えば、1520 年代から 1590 年代まで、つまり上述の先行研究で扱った時期に直接後続する時期に照準を定めた。具体的には、スペイン（神聖ローマ帝国）とフランスという超大国のはざまで揺れ動いた政治的に不安定な時期（1520-50 年代）から、スペイン軍によるシエナ陥落と共和国滅亡（1555 年）を経て、神聖ローマ帝国より封土を受けたメディチ家によるトスカーナ大公国の支配が確立するまで（1560-90 年代）を扱った。また主題的に言えば、上述の３つの観点を引き継ぎ、それらを密接に関連づけながら（特に①と②、①と③の関係を意識しつつ）、さらに別の画家たちの作品群へと適用することで、16 世紀シエナにおける宗教画とその歴史的コンテクストとのかかわりを、より総合的・体系的に明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

(1)　対象となる作品を実際に分析するに際しては、現地で作品を実際に調査・鑑賞するとともに、可能な限り良質な複製資料を入手することが不可欠である。そのため、イタリアでの現地調査を毎年実施して、聖堂や美術館においてできるだけ多くの作品を実見するとともに、現地の文化財監督局に所蔵されている作品写真をネガから焼付することで、広範囲にわたる資料収集を行なった。また、これと並行して、一眼レフの高品質デジタルカメラを用いて自ら撮影を行なうことで、独自の資料も入手した。撮影されたデジタル写真はコンピューターに保存し、適宜使用できるようデータ整理を行なった。

(2)　以上のような美術作品の分析と平行して、同時代の社会的状況について、一次・二次文献を駆使して可能な限り再構成することが必要であった。第一に、当時の史料や年代記を読解することにより、シエナ戦争と共和国滅亡に至る歴史的経緯を明らかにすることを目指した。第二に、政治的に危機的な状況の中でシエナ市民が救いを得るために行なった、宗教イメージを用いた儀式や礼拝の記録を洗い出し、それを実際の作例と関連づけることで、当時の宗教画が人々の生活の中でいかなる機能を果たしていたのかを文献面から明らかにした。以上のような文献調査を行なうにあたっては、一次・二次文献を購入して精読するのみならず、現地の古文書館に所蔵されている史料の複写や写真撮影を行なった。

(3)　作品分析と文献読解の成果をつき合わせて、共和国滅亡前後の時代のシエナにおける芸術と社会背景の関連を解釈するにあた

っては、トラウマ的な出来事がいかに視覚的に表象されうるのかという問題を扱った近年のメディア論や精神分析・心理学上の知見も、方法論的な観点から参考にした。また、効果的・効率的に研究を進めるにあたっては、留学時代に知己を得たシエナの研究者たちと連絡をとり合うことによって、事前にできるだけ調査・撮影上の便宜を図ってもらうだけでなく、現地での研究状況をリアルタイムで把握しておくよう心がけた。

４．研究成果

(1) 1555年の共和制崩壊以前のシエナにおける宗教イメージの問題については、まず2006年の論文「石の中のイコン」においては、15世紀から 16 世紀初頭のシエナにおいて流行した、中央に中世の聖画像を収めたルネサンス様式による壮麗な大理石タベルナークルム（壁龕）の制作に着目し、その造形的諸特徴、機能、社会的背景について考察した。こうした信仰形式が、16 世紀後半になると、大理石壁龕からいわゆる「絵画タベルナークルム」へと発展的に継承されていくことは、すでに 2001 年の論文で論じたが、本稿はこの先行論文を補完するものであった。

また、同年の論文「天のオクルス、あるいはベッカフーミ作《玉座の聖パウロについて》」では、16 世紀初頭に画家ベッカフーミが描いた同名の作品を分析した。その際に着目されたのは、聖パウロの頭上に描かれた、円形の枠に収まった聖母子のイメージである。このモチーフは、画中画にも、あるいは窓の向うに垣間見られた幻視にも見える。この表象が有するこのような揺らぎの背後には、聖パウロが『コリント人への手紙　第２』において述べている幻視体験の両義性、それをルネサンス期に再評価した新プラトン主義の思想、さらには、この作品が当初置かれていた礼拝堂＝裁判所という空間の特殊性などが想定されることを論じた。

他方、2007 年度の論文「〈白〉の画家」においては、画家ジョヴァンニ・ディ・ロレンツォの 1520-30 年代における活動と、同時代のシエナを取り巻いていた政治状況を関連づけて論じることで、ジョヴァンニが古画の再受容や様式的回顧主義の流行において果たした役割を明らかにした。特に、前述のベッカフーミの《玉座の聖パウロ》との比較において、ベッカフーミ作品ではイコン（物理的な礼拝像）とヴィジョン（超自然的な幻視）の間の区別が揺らいでいるのに対し、ジョヴァンニ作品では前者が後者の原因として想定されているという特異性が明らかとなった。

(2)　共和制崩壊以後の時代については、まず 2006 年の論考「シエナ―閾の聖像」において、シエナの城門をかつて飾っていた、聖母マリアの生涯を主題とするいくつかのフレスコ画を採り上げ、それらがどのような目的で、誰によって、いかなる時代背景のもとに描かれたのかを考察した。それにより、中世に端を発するこうした作品制作が、共和制が衰退していく不穏な政治的状況の中で再開し、さらに共和制滅亡後には都市の平安を記念するための戦後復興の対象となっていたことが明らかとなった

また、論文「カラスとトスカーナ大公」においては、1570 年頃におそらくフィレンツェの画家がシエナの一聖堂のために制作した《ペストの聖母》を論ずることで、シエナを支配下に置いたフィレンツェ大公の政治的野心が宗教画の中にどのように反映されているかを推測した。この時期のシエナ絵画については従来ほとんど研究されてこなかったが、新たな君主たるフィレンツェのメディチ家によるシエナ支配との関連という新しい観点を導入することができた。

(3)　共和制崩壊の直接的原因であるシエナ戦争（1552-55 年）については、2008 年 9 月に 10 日程度の実地調査を行なった。その際、シエナの都市防衛に尽力した建築家であったのみならず、同じ頃シエナ戦争にまつわる絵画作品を描いた画家でもあるジョルジョ・ディ・ジョヴァンニの作品を調査した。また、これと並行して、メディチ家のフィレンツェとの間で戦われた「シエナ戦争」に関する文献を網羅的に読解した。特に、同時代人ソッツィーニの『日記』や、シエナ側につき参戦したフランスの軍人モンリュックの『回想録』は、戦争当時の町（特にカモッリーア地区）の様子や人々の暮らしを生き生きと彷彿させ、またジョルジョ・ディ・ジョヴァンニの作品を解釈する上でも、きわめて有益であった。ジョルジョ作と考えられる２作品《シエナ市民を慰める聖パウロ》と《無原罪懐胎の聖母》に、シエナ戦争の衝撃やトラウマがどのように影を落としているかという重要な問題を中心とした研究成果については、2009 年 7 月 4 日の九州藝術学会例会において、研究発表を行なう予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①<u>松原知生</u>「石の中のイコン―ルネサンス期シエナにおける聖画像タベルナークルムの

制作と受容」『西南学院大学国際文化論集』第 21 巻第１号、227-268 頁、2006 年（査読なし）

②松原知生「天のオクルス、あるいはベッカフーミ作《玉座の聖パウロ》について」『地中海学研究』第 29 号、265-298 頁、2006 年（査読あり）

③松原知生「〈白〉の画家――ジョヴァンニ・ディ・ロレンツォとカモッリーアの戦い」『西南学院大学国際文化論集』第 22 巻 1 号、113-183 頁、2007 年（査読なし）

④松原知生「カラスとトスカーナ大公――シエナ、フォンテジュスタ聖堂《ペストの聖母》をめぐって」『鹿島美術研究年報』第 24 号別冊、55-64 頁、2007 年（査読なし）

〔学会発表〕（計１件）

①松原知生「カラスとトスカーナ大公――シエナ、フォンテジュスタ聖堂《ペストの聖母》をめぐって」鹿島美術財団研究発表会、2008 年５月 16 日、於鹿島ＫＩビル

〔図書〕（計３件）

①・松原知生「シエナ――閾の聖像」井口正俊・岩尾龍太郎編『都市を歩く』九州大学出版会、27-48 頁、2006 年（分担執筆）

②松原知生「レオナルドの時代の政治と宗教」池上英洋編『レオナルド・ダ・ヴィンチの世界』東京堂出版、371-387 頁、2007 年（分担執筆）

③米倉立子編、米倉立子・高倉洋彰・松原知生著『境界は出会いの場　非西欧圏のキリスト教文化　西南学院大学博物館新収蔵品展』西南学院大学博物館、2008 年（共著）

〔その他〕
ホームページ等

http://www.seinan-gu.ac.jp/gakubu/bn_kb/jiseki.html#MATSUBARA（西南学院大学国際文化学部教員紹介）

６．研究組織
(1)研究代表者
松原　知生（MATSUBARA TOMOO）
　西南学院大学・国際文化学部・准教授
　研究者番号：２０４１２５４６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし